

香川県・富山県の民家調査

1969年度建造物研究室の調査・平城宮跡発掘調査部 3

1969年10月から70年2月にかけて、香川・富山両県下で民家調査を実施した。この調査は各府県の教育委員会が国庫補助をうけて実施している民家緊急調査の一環をなすものである。香川県については、伊藤・細見・村上、富山県については、沢村・宮沢・細見・宮本が調査員の委嘱をうけた。富山県の調査成果については、すでに報告書が出版されており、香川県の成果もまた近く出版されるので、ここでは、その大要をのべるにとどめる。

香川県の民家 香川県の民家調査を全県にわたって実施するのは、今回が初めてである。まず、市町村が提出した民家のリスト249棟（第1次調査）のうち、83棟を実地調査（第2次調査）し、このなかから重要民家9棟をえらんで詳しい資料を作った（第3次調査）。調査対象となったのは、17世紀後半から19世紀にかけての農家と町家とである。

建設年代の明らかなものは13棟ある。最も古い民家は小豆郡内海町の菅悟氏住宅、これに続くのは、大川郡大川町の吉川栄氏住宅であって、それぞれ安永5年(1776)、同9年(1780)の棟札を持っている。このほか、高松市の小比賀信晴氏住宅（第1図・第3図1）と、大川町の旧恵利克巳氏住宅（第3図3）は、17世紀末にさかのぼるものと考えられる。小比賀氏住宅は慶長年間に建設したという伝えがあり、大庄屋にふさわしい大規模な家である。しかし、のちの改造が多く、当初の形に復原するのは困難である。旧恵利氏住宅は、普通の規模の農家であって、部材が細く、手法に古い要素をとどめている。



第1図 小比賀信晴氏住宅 四方蓋造り

香川県の農家の間取りは、横二間取・三間取（広間型）・前座敷三間取・四間取の4つの型に分類でき、地域的な分布をしめしている。横二間取（第3図2）は、土間に面して居室、その上手に座敷が横に1列に並ぶものであって、大川郡塩江町を中心とし、徳

第2図 谷川茂一氏住宅 ツクダレ

第3図 香川県民家平面図 1 大型農家 高松市 小比賀信晴氏住宅(現状 17世紀) 2 横二間取農家 長尾町 細川正治氏住宅(復原 18世紀初) 3 三間取(広間型)農家 大川町 旧恵利克巳氏住宅(復原 17世紀末) 4 三間取(広間型系)農家 白鳥町 山下増夫氏住宅(復原 18世紀末) 5 四間取農家 琴南町 谷川茂一氏住宅(復原 18世紀初) 6 町家 宇多津町 志村忠雄氏住宅(復原 19世紀中頃) 縮尺約1:550

鳥県との県境に近い山地に分布している。三間取(広間型)は、土間に面して広間をとり(第3図3), その上手前面に座敷、背面に寝間の2室がつくものである。大川郡大川町と白鳥町一帯および小豆郡にみられる。なお、三間取の先駆形態として、寝間のみをかこう、単純な平面(第3図4)があげられよう。前座敷三間取は香川県の中央および西部の山間部にみられるが、実例は2棟のみで、しかも年代が新しいものである。四間取(第3図5)は、土間に面して前面に居間、背面に台所の2室、その上手前面に座敷、背面に寝室をとるものを基本とするものである。香川県の他の地域に広く分布している。なお、四間取でも古いものは喰違い、新しいものでは、整形になる。大規模な家では六間取となるが、その基本はやはり四間取で、さらにその上手に座敷2室が備わる。さらに大規模な家(第3図1)になると仏間が独立する。

香川県の農家の屋根は、寄棟造草葺が大多数を占める。平野部では、その四方に「オブタ」とよばれる本瓦葺^{ひまし}の庇をつけた「四方蓋造り」(第1図)が多くみられ、これに対して山間部では、庇をもたず、草葺屋根を軒までふきおろす「ツクダレ」(第2図)が多い。棟おさえは平瓦を1枚ずつ棟にそってならべる。

町家の間取は、一方を通庭^{とおりにわ}、他方を室とする。室は、小さい家では1列2室(第3図6)、大きな家では、3列3室の部屋が並ぶものである。

富山県の民家 富山県においては、ほぼ全県下で調査を実施した。ただし、かつて調査されている五箇山地方は今回は対象外とした。第1次調査のリストにのぼったもの239棟、第2次調査を実施したもの63棟、第3次調査によって精査したもの11棟である。これらは農家・町家・漁家によって成り立っている。

富山県の古民家の残存状況は良いとはいえない。今回の調査による限り、17世紀にさかのぼるものはみられない。建設年代の明らかな最古の民家は、西礪波郡福岡町の佐伯有久氏住

第4図 富山県民家平面図 7 A型 朝日町 松原市次郎氏住宅(現状 19世紀初)
8 B型 礪波市 土木正平氏住宅(現状 19世紀中頃) 9 C型 高岡市 武田てる氏住宅
(復原 18世紀中頃) 10 町家 小杉町 老田富氏住宅(現状 18世紀後半) 約1:500

宅(第5図),これにつぐのは富山市の浮田総英氏住宅であって,それぞれ,明和4年(1767)の「家作諸入用」,文化7年(1810)の「家材木并品々留帳」を所蔵している。このほか,高岡市の武田てる氏住宅(第4図9)も,18世紀中頃に建設されたものとみられる。

富山県下の民家を概観して,注目されるのは,幕末から明治にかけて建設された家に,きわめて立派なものが多いことである。新湊市の宮林彦九郎氏住宅・汐海五一氏住宅,高岡市の菅野淳一氏住宅,礪波市の小林豊一氏住宅・小幡賢太郎氏住宅などがその例である。また,富山県には,大規模な民家が多く,とくに平野部に目立っている。しかし,礪波市の土木正平氏住宅(第4図8)・荒木文吉氏住宅などのように,小規模なものも若干残存している。

富山県の農家は,ヒロマ・チャノマ・ダイドコロの有無を基準として,図示したように,A・B・Cの3つの型に分類できる。A型は山間部,C型は平野部,B型は山間・平野の間部に分布している。ただし,大庄屋に相当する^{とむら}十村など,階層的に最上層を占める家は,特殊な間取りをもつものがある。

町家では,上記の汐海・菅野・小幡氏住宅のほか,下新川郡朝日町の川上甚市氏住宅・婦負郡細入村の島繁氏住宅・射水郡小杉町の老田富氏住宅(第4図10)などが注目される。

註 1 富山県教育委員会『富山県の民家』(1970.3)

2 関野克・伊藤延男『富山県五箇山民家予備調査略報告』(1956)

(宮沢智士・村上詔一)

第5図 佐伯有久氏住宅 庇が茅葺